
捨てられた聖女

konakusa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捨てられた聖女

【Nコード】

N9583Z

【作者名】

konakusa

【あらすじ】

いきなりの事だった、センター試験間近な私におこった出来事
聖女と言う称号と、聖女の最後のお話

ここは、異世界？ そんなファンタジーな話があるものか！！

聖女 0 (前書き)

短い話です、面白いかどうかは分かりませんが読んでくれたらありがたいです

聖女 0

楽しかった時間は長く長く、そして思い出となってしまっていた

あのころは、ずっと必死で、生きていくのに必死で好かれるのに必死だった

異世界と呼ばれる物をご存知だろうか？

今まで生きてきた世界とは、まったく違う世界の事だ

と、いつでも。まったく違う世界とはいきれない世界

しかし、決定的に違う物があつたら、それは異世界と言うしか説明できない物があつたら

素直に受け入れるしか方法はない

高校三年生の冬、12月に入る頃の事

推薦入試に見事滑った私は、センター試験を受けるために塾に通い勉強をして家に帰り寝る生活を送っていた

憂鬱な生活が続き、推薦で受かった生徒はセンターを受ける生徒のピリピリした空気を感じ取り教室は静かだった

そして、私にとって人生を大きく変える出来事が起こってしまう

塾を終え、頭に詰め込んできた物理の公式を忘れないように口に出して覚えて電車に乗り家に帰宅した

推薦に落ちた時の喪失感とセンターでの焦りで頭がここ最近痛くなる

その日も、夕ご飯を食べず痛くなってきた頭で布団に入った

入ったはずの私だった

もし、この時私が眠らずに夕ご飯をとっていたらどうだったんだろうか？

運命は、変わってくれたのだろうか？

もしくは、食べている最中に事は始まってしまったのだろうか？

でも、それも今ではどうでもいいことなんだろう

もう、私には時間がないのだから・・・・・・・・

聖女 1

「よくいらしゃいました、我が世界を救ってくれる救世主・聖女様」
よく覚えていないけど、多分こんなような言葉だったろうか？

自分の部屋の自分のベットの布団で寝ていた私の目の前には、今までお目にかかった事もないほどの美形な男がいた

眠りから覚めた私だったが、頭がまだ回転していない中、その美形な男から、ここは異世界で世界の危機だからあなたに救ってほしいなどとふざけたセリフをもらった

美形ながら変な言葉を言うものだと思いながら、私のまわりを確認する

服は昨日家に帰って着替えていなかったで、高校の紺色の制服を着ていた

ベットがなくなっている代わりに布団があった

それ以外に、私物はない

あったとすれば、制服に入れといた単語帳とアメと携帯電話と財布だった

私物確認が出来た私は次に辺りを見渡す

薄暗いためによく見えないが、ここは多分宗教的な建物なのだろう

私の後ろに、大仏の様なしかしすこし不格好な姿の像があったからだ
そして、この建物の中には見渡す限り20名ほどの性別不明の人たち
がいたからだ

不明なのは、目の前にいる男以外はフードで全体を被っている為だ
そこで、思い当たった私の考えは簡単だった

「意味が分かりませんが、宗教とかそういう関係で私はさらわれた
のでしょうか？ 異世界といわれても私はピンとこないし信じられ
ないんですよ」

多分私は、超現実主義者だと自覚しているからだ

今、思い出すと最近続いていた頭痛と、昨日の制服のまま寝てしま
った私は何かおかしかったとしか言いようがない

これは考えすぎかもしれないが、私の部屋にこのへんな連中が睡眠
ガスや頭痛を引き起こす何かを頭痛がした何日か前から撒いておき
時期を狙い起きない私を部屋からどうやってか拉致、そして今この
様な部屋に連れてきてこの様な演技をしているのではないか？

私の高校の先生から聞いた話だが、悪質な宗教団体などに捕まって
しまったらその教えを完全に鵜呑みにしてしまう人と言うのは本当
にいて、いくら犯罪行為に走ったとしても教えなのだからと、罪悪
感もなく実効してしまうのだという

この人たちも、そのような集団なのだろうと言うのが私の、その時

の仮説だった

しかし……………

「この世界は、今魔王なるものによって土地は腐敗し人々は殺され、数ヶ月前には、魔王誕生の地からほど近い場所にあった軍事大国が崩壊してしまいました。我が手を尽くしましたが、魔王そしてその臣下にいる魔族の進行は止まるところを知らず、今なお多くの国が危機に陥っています」

先ほどの私の言葉を華麗に無視し、この世界の現状を説明してくる美形な男

私は、布団から体をだしどうやったらこの頭がイカれた人がいる場所から逃げれるかを考えていた

魔王？ 魔族？ どこぞのファンタジーゲーム？

「先も言いましたが、私はあなた方の茶番に付き合っているほど時間はないんです、もうすぐセンター試験も近いんです」

度胸だけは、人一倍ある私だからこそ声にだして言える

多少自分のなかでこんなこと言って大丈夫かな？ などと言う感情もあったが、言ってしまった物はしょうがない

しかし、この男は今度は少し困ったような顔を見ると私に手を差し伸べてきます

いくら美形といっても、人様を拉致してくるような人間だ

手を取ってしまえば危ない

私は、彼の手を借りずに立ち上がると、彼も少し驚いたような顔をしたが今度は、少し泣きそうな目をしていた

「今日は、疲れたでしょう。この建物は、王宮管轄の神殿なので王宮は目と鼻の先にあります。そこで今日は休んでください」

でも、私は今起きたばかり何ですが、などと思いながらも、逆らったらずいかな？ と、こちらへどうぞと言う彼についていく

歩いている中で、外が夜なことに気がつきおかしいな？ と思った。

もし彼らが私を拉致してきたなら相当時間がかかったはずだ

私が自分の部屋で寝たのは11時頃で、建物の窓はまだ暗く太陽すら出るほど明るくない

つまり、今はまだ寝た11から5時間から6時間しかたっていないと言っことだ

でも、こんなでかい建物は、このあたりにはなかったし、建てるにしてもこんな宗教団体の建物だ

街中ということはないだろう

ということとは、ここはどこか田舎もしくは山の中と言っことも考えられる

だけど、私が居たのは日本の首都で、いくら日本がたるんだ国だからとここまで怪しい集団にこのような場所を首都に提供するはずがない

ましてや、首都の土地なんて高いはずだからここまで広い土地を買うのだって資金的に無理な気がするからここは、首都ではないだろうと、するとここは、最低でも土地があまり高くなくそして過疎化が進んでいる地域と言うことになるだろう

そして、ここが異世界でないと言う決定的なことは彼が日本語を使っていることだった

異世界だというなら、何故彼は日本語を喋ることが出来る？ それ
が、ここが異世界でなく日本だという事を決定づけているではないか
そうこう考えている間に、私と彼は神殿と呼ばれる建物から出た、
出てしまった………

「何？ ……これ」

私が予想した通りにここは、この神殿は山の上にあった

この建物は山の上にあったのだ、しかし山から見える光景に私は自分の目を疑う

「この王宮はね、魔王が現れてから急ピッチでつくられた建物なんだよ。なぜ山の上かと言うとまあ、わかるよね？ 敵の攻撃を避けるためだよ。街の真ん中にこんな大きな建物があったら標的に

なってしまう」

私の目の前、山の下には街が建っていた

日本のような木造建築でつくられた建物ではない、レンガの建物だ

いや、日本も最近そんな家が増えてきているからありえなくもない

でも、あれは過疎化が進んだ地域にしては大きい町だ

山の上から見ているのに、分かる

そこは、大都市だと

「この国の名前はカーネス王国そしてあそこはカーネスの王都。
この国最大の都市だよ」

私の横からは、丸でそれが事実と言つような迫力ある声が聞こえる

「そして、人類の最後の砦の国だ」

聖女 2

神殿と呼ばれる建物を出た私は、山の頂上から見た大都市をみて絶望を感じていた

そばにいた美形な彼から見たら、あの都市を見て感動している私という姿見見えたのだろう

「さ、行きましようか。 素晴らしいのはこの王宮も同じですよ」
などと、言った

でも、そんなではなかった

考えて考えて結論づけた、ここは日本ではないのだと

いくらなんでも、あの大都市を宗教団体が作れる分けもなく、ましてやあんな大きな都市が知られていないと言うことはありはしない
仮にここが日本だとしても、あれほど美しいレンガで作られている街が観光名所にならないわけがない

つまり、ここは日本ではない

そう、日本ではないだけかもしれないのだ

往生際が悪い私は、次にここがどこか別の国だと思っことにしていた
だからか、思っていた

いつかは、絶対に日本に帰れると。

でも、次の日には私の希望はあっという間に打ち砕かれたんだ

救世主、そんな言葉を次の日、異世界2日目からよく言われるようになった

私に話しかけてきた美形な男は、この国の第一王子だと昨日の夜、部屋に入るときに言われた

しかし、私は「へえ」としか言わず、王子は部屋を出て行き私は部屋で今までの出来事を整理した

この国の王子と言う奴が言った、ここは異世界などという馬鹿げた言葉を否定する私なりの答えを見つける事にした

眠くはない、先ほどまでずっと寝ていた訳だから、考える時間はあった

この世界を私なりに否定する答えを求めた

そして見つけた

でも、そんな浅はかな私の希望もあっさりと打ち砕くかのように、次の日の王との謁見で見ることとなる

魔法

おとぎ話で、たまに魔女などが使う不思議な力がこの世界にはあった

私たちの世界にない、魔法というものが有ってしまった

私の希望は、異世界などというものを証明することは誰にもできない、だからここが私の世界でないと証明できるものは何もない。私は他の国に拉致されただけなんだ

だから、戻れるんだ。私の家に……………

王は言った

「魔王は、強大な負の魔力で我々人間を殺している。負のエネルギーは人間に宿る魔力では太刀打ちできない、だから貴殿が必要なのだ。負の魔力と相反する魔力をもつ聖女、つまりそなたがだ」

つまり、私に魔王なるものを倒すのはお前で倒せるのもお前で倒さなくてはいけないのもお前だと

この世界になにもしてやる義理はないはずの私に、王はそういったでも、そこで疑問が生じる

私にそんな力があるのかと？ いままでのんびりと平和の世界で過ごしてきた私にそんな力があるのかと

叫びたかった、そしてふざけるなと言いたかった

でも、でもだめだった。直感が、私の直感が継げている、何もしやべるな

逆らえば殺されるのだと、生きられなくなるのだと

そして、魔王を倒すための準備が始まった

私は、自分の魔力を掴むため魔導士のコーチの元、一週間と短い期間で寝る間も省いて勉強させ、られた

コーチをした魔導士は、20代ほどの若い女性魔導士で、私に分からないことはやさしくではなかったが、分かるように教えてくれた私をここまで連れてきたこの国の王子も、一週間の間に何回も私と話をしてくれて二人とはすぐに仲良くなった

そこでしたのは、何故言語が違わないのかと言うのは、私を召喚する時に魔方阵に組み込まれていたもので、完全翻訳機能が私には備わっているかららしい

魔王に相反する私に魔力は、正の魔力。 光の力なのだぞだ

人間は、誰しも魔力を持っているが使えるのが四大元素、火・土・水・風の魔力だけだ

聖女の私は、光の魔力・一般知識では正の魔力

魔王の魔力は闇の魔力・一般知識では負の魔力

魔王を殺せるのは聖女の正の力であり聖女を殺せるのは魔王の負の魔力だけだ

これまで、魔王は2度この世界に誕生する、そしてそのどれもが異世界の聖女によって葬られているのだそうだ

そして、聖女は役目を終えると（つまり魔王が死ぬと）負の魔力を吸収して、異界への扉を開く

胡散臭い話だと思うけど、そんなような話を私は聞かされ信じてしまった

準備が整った

私は魔力を完璧にないにしろ操ることに成功していた

そして旅立ち

魔王討滅の為に集まったのは、魔導士が私をコーチしてくれたラムダ、剣士には王子のギル、遠距離攻撃に魔導士のサラサと弓使いのルーク、回復には王女のリーネの6名の旅となった

多くの国民に讃えられながら私たちは最初に、この国から程近い小国カリアドに向かう

旅には徒歩と言うだけではなく、馬車で向かった

途中、山賊に何度も遭遇しそして、私も人を殺す

初めての日は、泣き崩れた

辛い、苦しい、死にたい、ごめんなさい

だれでもいいから私を責めてほしかった、なんで殺したのと責めてほしかった

だけど、答えは決まって「よく殺したな、次も殺していけよ」

なんて残酷な言葉、でもこれしか、この言葉しか誰もかけてくれはしなかった

そして、旅は順調に進み、順調に私をこわしていく

4度目の山賊との遭遇には、すでに殺しというものに私は慣れてしまっていた

殺しても、殺してもなにに思わなかった

そんな時、そんな私に声をかけてくれたのがギル王子だった

彼は言う、「ごめん、ごめんな。君を傷つきたいわけではない、悲しませたいわけではない。でも俺は君を傷つけることしか与えてやれない」

悲しそうな彼の言葉は、私の心を暖かくしていった

私は、こんなにも思われているのだと

旅が進に連れて、魔族が現れ始めた

魔族は、人間の形をした生き物だった

彼らの言葉は、完全翻訳機能がついている私にすら何を言っているのか分からない言葉だった

2つ彼らが人間と違う物があつた、一つは言語、そして一つは瞳だ人間は、私と同じ黒目しかない

しかし、彼らの目は赤いのだ

血塗られた赤なのだ

私は毎日のように魔族と殺し合いをした

魔王が近くにいる証拠だった

そして、ついに魔王の城にたどり着く

奇跡的に、これまでの旅で傷ついたり死んだりしたものはいない

そして、これまた奇跡的に、ギル王子は私の恋人になっていた

もし、もし魔王が死んで元の世界に帰るとしてもギル王子も来てくれると言った

うれしかった、泣いた

そして、私は今魔王の前にいる

目の前の魔王は若い20歳代の男だった、もう決着はついたようなものだった

彼は腹を刺され、もう目も朦朧としている

私は最後の情けと、首を切り楽にさせようと聖剣を振り上げた時だった

「何故だ、何故我々が負けねばならない」

魔王が、始めて口を開く

魔王は魔族と違い、人間の言葉を話せるようだ

私は言った、お前たちが人間を死に貶めるからだ

「死？ 人間？ ……そうか、お前は知らないのか。我らの歴史を」

そして、魔王は目を私に向けて言った

「……俺たちも、人間なのだ。差別され続けている人間なんだよ」

血を吐き出しながらも、しゃべり続ける魔王

この世界には、人間とよばれる種族がいる

そして、長い歴史の中、人間はまた人間の中に格差を作り差別を作る種族だった

人間の中には、黒の目を持つものを上位種、赤の目を持つものを下位種としていた

上位種の人間は、下位種の人間を差別し奴隷のように扱った

しかし、長い歴史の中で下位種の人間の中にそれは違うのではないかと叫ぶ男が現れた

1人目の魔王であった、彼は下位種の人間を率いて上位種の人間の国を倒す

そして、叫ぶ

「人は平等だ、何故我々は目の色だけで差別されねばいけない」

当然、下位種の人間が齒向かったことに怒り、上位種の人間は戦う

しかし、初めに反旗を起こした男は、神から力を授かっていた

絶対的な闇の魔力だ、闇を制御するための魔力だった

上位種の人間は、意味の分からない力を使う人間を恐れ、彼らと同類と言うのを消し去り

彼らを新たな世界の敵、魔王と魔族といい始める

そして、人間として悪の根源の魔王を倒すため別世界の扉を開き生贄を召喚する事を考える

そして、最初に召喚されたのは、15歳の少女だった

そして、物語は彼女と同じように進む

おかしいな、とは思っていた

だって、魔族と人間の違いが瞳の色だけだなんておかしいと思っていた

しかし、彼らも人間だったなんて、差別されていただけの人間だった何て……

「時に、お嬢さん。君の名前はなんと言ったい？」

最後の力を振り絞り喋る人間の青年がそこにいる、魔王ではなく人間の青年だった

「わ、私は……」

わたしは……

「なんで、泣くなよ私、泣かないでよ」

気がつくとも目から涙がこぼれていた

だって、名前が、名前が思い出せなかった

そっいえばそうだ、もう一年以上呼ばれていない名前

仲間からも、なんという名前かも尋ねられなければ呼ばれることもなかった名前

そうか、私は……

「君は、使い捨ての聖女なのか……」

仲間のもういない、この場所にはいない

時期にこの空間は闇に飲み込まれ消え去るのだから

仲間は、もう私を置いて帰ってしまった

「いえ、彼らは、もともと仲間ではなかったわね……」

そして、最後に見たのは魔王の冷たい死体だけだった

聖女 3 (前書き)

もう少し、書かせていただきます

ギル王子視点です

聖女 3

父が突然召喚の儀を行うと神官と王族に言い出したのは一年前の今日だった

前回行われた儀式は、今から150年も前の事で、召喚に使われる陣も呪文も何一つ分らない中で召喚の為の作業が行われた

召喚の陣・呪文は、昔の文献を元に神官が、召喚の知識を広めていく

何故突然召喚などするのか？

それは、魔王と魔族がここ最近になって活動を活発化させているからだ

魔王の発見は、数年前に見つかってはいたが、今回の魔王は消極的だったために警戒するだけになっていた

しかし、つい一年と半年前に魔王・魔族領からほど近い小国が魔王の手により陥落した

その情報がわが国に届いたのはそれから数ヶ月後のことだ。

人間と魔王の戦いは今まで二回あったが、そのどれもが異世界の聖女によって収束させられている

なぜ、異世界の聖女によって収束出来ているのかと問えば、魔王の負の魔力に張り合えるのは正の魔力しかないからだ

異世界に渡りこちらに来た人間は、魔方陣によって正の魔力を有することが出来る

だが、そんなような魔方陣を作ったのかは分からないがすべては、聖女の手にかかっていた

聖女召喚、聞こえはいいが、本質は生贄の召喚であった
今まで、二回召喚された聖女は、そのどれもが最後魔王と相打ちで
死んでいた

だから、3回目の聖女も死ぬのだろう
だが、哀れの目で見てはいけない

聖女に逃げられてしまえば、もともこもないのだから

召喚の儀が始まり、聖女がこの地に舞い降りた
私は、王子として聖女の案内役をする事になっている

さあ、出番と陣のそばに来てみれば聖女は、布団とともにまだ眠っ
ているではないか

コイツが？ こんな聖女が人間を救える？ あやしいものだ
さらに、聖女が起きるや否や俺の言葉を無視して、攫うだとかおか
しな宗教団体だとかいい始める始末

まわりの神官たちも困惑気味でいた

しかし、聖女有能力、つまり魔力が相当な物だと言うのはラッキーだ
聖女の魔力の使い方をしたラムダは、彼女の魔力的素質を大いに評
価していた

通常、魔力と言うものを感じとるには魔導士でも、一ヶ月もの歳月
が必要なのだ
それを彼女は二日でやり遂げ、残りの五日を魔術を使う練習に専念
している

しかし、ラッキーとアンラッキーと言うべきでもある

文献によると、二番目の聖女は魔力を掴むのに、通常どりの一ヶ月がかかっている

魔術に関しても同じで、魔導士が一つの術を使えるのにかかる時間は、一週間

聖女も一週間かかったと書いてあった

つまり、聖女

三番目の聖女は、明らかに以上の魔力の使い手だ

俺たちも、文献をたよりにここまでできたので、最後には相打ちかもしれないが倒した後に死んでくれるだろうと思っていた

しかし、今回の聖女はそうはいきそうない

聖女が元の世界に帰れる手段など我々は知らない

だが、もしすべてが終わり、元の世界に戻れないと知った聖女がどのような行動に出るかわからない

そこで、神官や王と相談し、聖女を魔王もろとも闇に葬り去る事になった

俺の国には、古くから伝わる神具がある

あらゆる物を、闇の彼方へと葬り去る物だ

しかし、これを使うには王族の血筋の者にしか使うことはかなわないなので、俺も、旅に参加することになる

しかし、王子一人では危険とあと四人、魔導士のラミダ、サラサ、弓使いルーク、そして回復にリーネが参加することになった

つまり、この四人は、聖女の魔王討伐の為の者たちではなく俺の護

衛の者たちだった

聖女には、俺たちのことを魔王討伐の仲間と偽って話してあった

彼らには、なるべく聖女と親交を深めないようにと伝えている、情が移れば始末するときに感情がそれを阻む

そして、魔王と聖女の討伐の旅が始まった

旅の最中に、だんだんと問題が起こり始めた

聖女が、壊れ始めてきたんだ

彼女は、人を殺したことが、生き物をこの手で殺したことがないらしい

聖女は、初め一人殺し、また一人殺し、だんだんと体の精気がなくなっていた

このまま行けば、魔王と戦う前に聖女が死ぬか魔王を倒せないで死ぬ可能性が強くなっていった

魔導士ラミダは、女は恋人の為なら何でもできるなどと、俺に恋人役を演じろと言い出し始めた

そこで、俺は初めて聖女の顔を見ることがない事に気がついた

彼女は生贄だからと、彼女と壁を作っていた自分がいたことに気がついた

泣かなくなった聖女、いつも夜になると月を見上げているようになった彼女

彼女は、最初のころは表情豊で笑うこともあったが、今は笑わずひたすら魔族を殺していく無表情な顔になっていた
目も死んだような目になっていた

助けたい！ 初めて彼女を見て思った俺の気持ちだった

けして、美しい顔立ちではないが、俺は彼女に好意を抱き始めた

だが、ここで俺が好意をもって彼女を生かす道を選択すれば、そしてもし元の世界に帰れる手段がないと知った彼女が、彼女を召喚した俺の国を憎み破壊する行動にでたのなら、責任を俺は取ることはできない

だから、俺は王子の仮面をかぶって彼女を、聖女を騙すことにした
偽りの恋人を演じた

そうすると、だんだんと彼女の表情も明るくなってきて、元気に笑うようになった

彼女がうれしそうな顔をすればするほど、俺のこころは悲しみにそまる

彼女が俺に甘えれば、俺は心臓がえぐられたような痛みが走る

頼む、俺にそんな顔を向けなくてくれ！！

俺は、お前を騙してるんだから・・・・・・・・

運命の時が来た

魔王と対峙する彼女が見える

必死に聖剣を振りかざし、魔王を殺そうとする彼女が見える

そして、そんな必死な彼女に俺は気付かれないように神具を発動させた

魔王の城は、神具で作られた闇の球体に飲み込まれいく

時間が過ぎていく

闇の球体は、魔王の城を取り込むと収縮を開始した

小さくなっていく球体を目の前で見ながら、俺は泣きそうな目をこらえながら彼女の最後を見送る

そして、球体はもう俺の手の拳ぐらいの大きさになると、弾けるようにして爆発し、この世界から消えていった
残ったのは、五人だけ

最後の最後まで利用した聖女はもう、この世界には存在していない

聖女 4 (前書き)

魔導士ラミダ視点です

聖女 4

国王の命令で、召喚の文献に探すことになった
仕事をもらうのは久しぶりだったため、命令をくだされた時には舞
い上がった

150年以上も昔の文献、それも召喚の本を探すのは大変な苦労だ
った

この国のもっとも大きい図書室に通い詰めて二ヶ月、漸く見つかつ
た古い魔導書

しかし、見つかったのはいいが、文字が150年前と現代では違っ
ているため翻訳をしなくてはいけない

本当に、この一年は疲れることだらけだった

私は、この国最強といっても過言ではないほどの魔術の使い手だ
ここ最近になって、魔族の動きが活発になつて魔導士の本職の仕
事がもらえず、政務などというわけの分からん物をやらされてきた
人数が足りないからと言って、こちらに政治の仕事を持ってこない
でもらいと思っていたら、この召喚の仕事がきたわけだ
召喚の儀では、私が魔力をあやつり陣を発動させることになっている
けっこうな大仕事だった

私、一個人として召喚の儀には、反対だった
救世主、聖女といっても、簡単に言ってしまうえば、人間の生贄なんだ

ことはまったく関係のない世界で、私たちの代わりに死んでくだ
さいと言う儀式だ

文献を探している間は、久しぶりの魔導士の仕事と喜んでいたが探
し終わり翻訳が終わると、冷静に今まで自分が調べていたことを考
えることが出来た

神官どもは、私が調べた資料をまるで自分がやったかのような言葉
で、王宮に広めている
もう、後戻りはできない

そもそも、魔族とはなんなのか？

今の王族すらもその答えを知っている物はいなく、大陸の中でもこ
く僅かな人間しか知らないだろう

私もこんなものを調べなければ知ることなかった

彼らは、私たちと同じ種族なんだと

笑ってもいいだろう、同じ人間同士で殺しあっているのだ
それも、過去に二度もだ

私はこの事実を知ったとき、久しぶりに大笑いしてしまった

さらに、同じ種族のあらそいに、別の世界の人間が強制的に参加さ
せられている

人間のおろかさはここまで極まればわらわずにはいられないだろう？
しかし、事実を知っても私は召喚の儀を止めることも、止めようと
叫ぶ事もなかった

着々と、準備が進められていく

そしてついに、召喚は始まった
私が発動させた、この愚かな戦いが無意味だと知っている私が、召喚の陣を発動させた

召喚されたのは、18の少女だった
文献にも、若い聖女と書かれていたので予想はしていた
しかし、魔導士の私は召喚され眠った状態の少女を見て正直に怖いと感じた

少女が怖いのではない、少女のもっている魔力にだ
魔導士の私には分かる、この召喚された少女の持つありえない量の魔力を……
ずば抜けていたのはそこだけではない、彼女の魔術の相性も天才と呼べるほど

冗談で一週間でと言ったのを、彼女は実現させてしまったのだから天才というしかない

彼女は、160センチほどの身長で、美人と言うほどではないが笑うのが似合う子だった
あまり、親しくなつてはいけないと思いつながらも、気がつけば私の初めての親友と呼べるまでの存在になっていた

旅がはじまった

平和の世界からきたのだろう
始めて人間を、間接的ではないにしろ殺してしまったときの彼女の絶望の表情は今でも思い出せる
ここ最近、山賊がでると言うのは聞いていたが、王都のすぐ近くで

教われるとは夢にも思わなかった

彼女には、相手の隙を狙って魔術を使ってもらったが、運悪く山賊にあたり体ごと解けてなくなった

光の魔法は、太陽と同じ熱を持っている術を作り出せる

彼女には、そんな危ない魔術ばかりを教えている。

言い方は悪いが、彼女は人間兵器なんだ

そんな風にしたのも、仕向けたのもこの私だった

ギル殿下から、彼女を魔王と共に始末すると聞かされている

覚悟は出来ていた、二度の召喚によって呼ばれた歴代の聖女は相打ちと言う形で死んでいる以上、聖女は魔王と共に死ぬのが一番

生き残っていたら、人間達が逆に迷惑だ

復讐されるかもしれないからだ

私は道化になることにした、いつでも笑って彼女を褒め、彼女を聖女にし続けるための道化

魔王と対峙する彼女がいた

魔王城には、もう魔王しかない

それ以外は、すべて殺した

聖剣を手に入れた彼女は、間接的に人間を殺すことに、魔族を殺すことになった

その代わりに、彼女は心を壊していく

このままでは、魔王の前に死んでしまう

だから、道化の私は彼女に恋人を作る

彼女が信頼を置いていたギル殿下を、恋人にした

人間というものは、痛みを分かち合える人間がいれば心が軽くなるのを知っていたからだ

もう私は彼女の親友ではないだろう

彼女は私をまだ親友と思っているだろうか？

彼女がすべてを理解するのは、多分すべてが終わったあとだろうけど……

ごめん、ごめんね

「……………」

そうだった、そうだったね

名前、聞いていなかったね

あなたの名前、私知らなかったね

「ごめんね、聖女様」

結局、彼女は聖女と言う言葉でしかなかったのだ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9583z/>

捨てられた聖女

2011年12月31日20時45分発行